

## 和泉式部の歌一首

和泉式部は、寛弘四年（一〇〇七）十月二日、最愛の人帥宮（そちのみや）（敦道親王）と死別する悲運に逢った。そのとき宮は二十七歳、和泉は、それより数歳の年長であったと思われる。和泉が宮の求愛を受けてから、まだ四年半しか経っていない。和泉は、世の妻が夫の死に逢ってするよ様に、一年の喪に服し、その間に詠んだ故宮追慕の歌が、和泉式部統集に百二十二首連続して収められている。拙著『和泉式部集・和泉式部統集』（岩波文庫）の通し番号でいうと、九四〇から一〇六一に至る歌群である。私はこれを「帥宮挽歌群」と呼んでいるが、優に一部の家集に価する質と量をもち、古今に比類を見ない挽歌群ということが出来る。和泉式部にこよなく心引かれ、数々のすぐれた式部論を書いている寺田透氏の用語によれば、最愛の人を死によって奪われたのちの、「空虚を実体として思ひ知った」（「和泉式部の歌集と日記」——「展望」昭和三十九年十月号）歌で、それは充たされている。

その中に、次の一首が入っている。

身よりかく涙はいかがながるべき海てふ海は潮やひぬらむ（九七七）

この歌は、「ならはぬ里のつれづれなるに」という詞書を持つ一連十一首の第三首に相当する。住み慣れない里の「つれづれ」にまかせて詠みつがれた連作の中に入っていることになる。服喪のための独居が、別の場所ですづけられているうち、つぎつぎと口をつけて出てきたものと思われる。その中の一首「身よりかく」の歌は、和泉式部の数ある難解歌の随一として、永年にわたり私を手こずらしてきた詠である。

ところが、故保田与重郎氏が、昭和三十九年に出した『現代畸人伝』の「序」の後半部を占める「涙河の弁」という一章にふれる機会があつて、図らずも解明の緒を見いだしたのである。それはまさに、眼から鱗が落ちるような爽快な体験であつた。

保田氏の「涙河の弁」の発想の源は、古事記上巻に見える建速須佐之男命の涕泣の神話である。命は、父の伊邪那伎命に委任された海原を治めようとはせず、長い歳月を激しく泣きつづけるのであるが、その泣く様は、「青山は枯山（からやま）の如く泣き枯らし、河海は委（こ）に泣き乾しき」というほどであつた。父神に泣く理由を尋ねられると、「僕は妣（はは）の国根（くにね）の堅洲国（かたすくに）にまからむと欲（おも）ふ、故哭（か）くなり」と答えた。永年にわたり際限もなく泣きつづけて、涙の量が増せば増すほど、海や河の水

は増しこそすれ、それを涸らすというのは、どういふことか、という疑問が起くるのは当然である。さすがの本居宣長も、この箇所の解には手を焼き、『古事記伝』で、「抑此神の啼給ふに因て、山海河の枯乾かかんるは、如何なる理にかあらむ」と疑い、さらに「泣けば、涙の出る故に、其涙のかたへ吸取られて、山海河の潤沢うるさは、涸るるにやあらむ、さて潤沢の涸るれば、万の物は枯れ傷しやぶはるゝなり」と苦しい解釈を加えている。それ以来十分納得のいく解は得られないまま現代に至っていた。ただ、寺田寅彦氏が、物理学者の立場から、噴火のために草木が枯死し、河海が降灰によつて埋められることを連想させる（「風土と文学」という仮説を出されたことがあり、さすがとは思ひながら、まだ納得するところに至らなかつた。

ところが、保田氏は、右掲書の「涙河の弁」でこの神話にふれ、日本人の精神史の上から、適切な説明を与えてくれたのである。

保田氏によると、この神話は、自然の水気が人の体内を通つて、その瞳から涙となつてあふれ出るといふ、古い日本人の考え方にもとづくもので、瞳をついてあふれる涙の量が多ければ多いほど、河や海の水という水、土中の水気という水気を吸い上げ乾しつくし、そのために、草木は枯死してしまふと信じられた。そこでは、天地自然の循環の理法に、人間の生理と心理が一つに溶けあつているのである。このような考え方の発展が、平安時代になつて「涙河」や「涙の川」の歌語を生むに至り、伊勢物語や古今和歌集の出た頃から、盛んに用いられるようになった。和

泉式部も、この歌語を詠み込んだ歌を多く遺している。「ならばぬ里のつれづれなるに」の詞書を持つ十一首の歌群の中にも、次の歌が入っている。

身を分けて涙の川のながるればこなたかなたの岸とこそなれ（九八二）

保田氏は、「涙河の弁」の中で、この歌について、次のように述べている。

……貫之朝臣の歌（例えば、夜とともにながれてぞゆく涙川冬も凍らぬ水泡みなぶなりけり古今集恋二▽清水注）では、修辭学の講義だったけれど、和泉式部のうたからは、その音がきこえてくる。涙川がうつそみの身の身のうちを流れ、身うちに深淵をなしてゐるのでなければ、曲のない始末となったわけである。身を分けての歌など、翻訳される時最も心配なものの一つで、簡単に散文化出来ない。（中略）彼女の観念や感情は、いつも肉体の生理に直接結びついてゐた。感情の場所を、肉体を打診して、こここことたしかめたやうな、そんなことばかり考へてゐた誠実無双の女人だった。（四一〜四三ページ）

「こなたかなたの岸」は、此岸（この世）と彼岸（あの世）の意で、生き残った自分と、この自分をおいて永久の旅に立った宮を、肉体の記憶の中にたしかめた趣が見える。

「ならばぬ里のつれづれ」にまかせてよまれたという「身よりかく」の歌は、その中に「涙川」

の語は含まないが、まさしく須佐之男命の涕泣の神話と同じ発想によっていることがわかる。それは、「涙川」の歌を遺した多くの先輩を超えて、一気に原始の神話の発想に直結しているのである。歌意は、こんなにわが身から涙があふれ出ていると、海という海の潮はすっかり干上がってしまうだろう、そうすると、水源を失った涙は、どのように流れたらよいのだろう、流れようがなくなるのではないか、というのである。ここでは、「空虚」は宇宙大に拡大されている。したがって、その中へそそぐ涙は無限の量を要し、はては大海の潮をも涸れさせ、宇宙を破滅に導くに至る。われわれは、この歌を読んで、怖るべき和泉式部の文学世界をかいま見た思いをいだくのである。

(平成一・一一)